



進取餘行

全

和 1
1/101



和
門
歸
卷
1101

進
取
餘
稿

完

進取餘編



大橋 正順字ハ周道訥庵ト号ス江戸ノ人ト
 學ヲ興起シ名分ヲ明カニスルヲ以テ巳カ
 任トス其著ス所口闢邪小言元教紀略等遍
 ク海内ニ公行ス文久ニ任成テ月十二日罪
 ヲ得テ縛ニ就キ江戸獄舎ニ下ル其秋七月
 七日病ニ因テ獄ヲ出テ都宮藩邸ニ幽居ス

皇國蒼生又次漫士集錄



此月十二日遂一起之年四十七谷中天王寺
二葬ル今其詩三首ヲ録ス

刑屍累々鬼火青枕頭時覺北爪腥婆心憂世夜難
睡起自忘端見大星

白癡相率慕腥羶漸看萃民欲祭祆撲滅妖氛果何
日慨然撫劍問蒼天

尊王攘夷豈無時何計危言却被疑今至蓋棺吾
已矣秋津洲裏一男兒

見鳶矯字ハ強ク自カラ葦原處士卜筮ス下

野宇都宮ノ人幼年水戸ニ遊ヒ贅ヲ藤田東

湖及ヒ茅根寒緑ニ執ル壬戌正月廿八日縛

セラシ其歳六月廿五日江戸ノ獄中ニ死ス

年二十六其囚ハルヤ自ラ處士強介墓ノ

立字ヲ大書シ述懐絶筆ノ詩歌數十首ヲ為

ル今詩三首歌二首ヲ録ス

上安 聖主下安民誓典奸臣不戴天一笑椒山胡

銜革空將疏奏逆豪權

廿年鞠育未酬恩世吏多難頻走夸紅淚教行燈下

別黙而再拜大乾坤

爰讀文山正氣歌平生必養顧如何後容唯待就刑

日含漢九原知己多

二道山ふくは國くか〜〜〜あ〜ふ〜〜るハ神

そふ〜〜〜

大更のうふふかふを〜〜ゆき波の旅力持乃

袖結る病ハ〜のうハ

平山繁茂兵介ト稱ス常陸ノ人往年醜虜ノ

跋扈ヲ憂ヒ同志二人ヲ伴ヒ凶軍上國ニ赴

キ泉原ニ到リ其二人逮捕セラレ是ニ於テ

頭髮ヲ利リ微行関東ニ下リ壬戌丙月十五

日江戸坂下ニ死ス年二十一少調細谷忠育

ナル者ナリ今詩一首歌二首ヲ録ス

丈夫摠義死何悲成敗在天寧可期骸骨狼消武及

土精神留欲護 皇基

吳竹のうきふ〜〜〜とたれ〜〜〜の乞ハ

う〜〜〜や〜〜〜あ〜〜

吹風ハあ〜〜〜と〜〜〜ハ大更能ハ〜〜〜カ〜〜

らきやうきやう

小田朝儀彦次郎ト稱ス常陸ノ人沈実ニシ
テ畧アリ嘗テ身ヲ國家ニ致サント欲シ後
客トシテ家ヲ出テ戌巳月十日江戸坂下
ニ死ス浅田儀介是ナリ今歌二首ヲ録ス

東海乃むきーのきき多きありーと云ふふあきよ
あーくろみきつるき
見よやうきよしんあきあきーのいふさうりしんせのまきの
きのききありき

越智通桓字ハ士威頭三ト称ス下野吉田村
ノ人人ト為リ慷慨死ヲ視ル曰ルカ如ク壬
戌巳月十日三島三郎ト称シ予山諸子ト
典ニ江戸坂下ニ死ス年二十五年今其詩二首
歌三首ヲ録ス

生来西度決必死二十五年又迎春丹心一片斃不
已再生又掃犬羊塵
奮然決起掃棒荆一剗直当百万兵成否元来皆有
命欲函報國尽忠名

白髮のきけとていふも 園のつるをみるは 志くは

神をまじりて 驚きよまぬ又た多きまことし けは 志くは 多めを

うらみあきらまは 志くは 志くは 志くは 志くは

黒沢保高五郎ト称ス常陸久慈郡ノ人肥幹
長大膂力衆ニ超タリ辛酉丑月高輪東禅寺
夷人館へ闖入シ逃レテ身ヲ潜メ吉野政介

ト変名シ壬戌丑月十五日坂下ニ死ス年十
有九歌一首ヲ存ス

多めをまじりて 志くは 志くは 志くは 志くは

高畠胤正万藏ト称ス常陸久慈郡ノ人東禅
寺ノ役其前尊ヲナシ逃レテ潜匿シ相田千
之允ト名乗リ壬戌丑月十五日坂下ニ死ス
年三十七歌二首ヲ存ス

此の川のまよふ支流のきけのあはれ 志くは 志くは 志くは 志くは

まはるるあまを
むらさきかきとるふきをいそぐとも、世を邪れ
月城あかき

河邊元善左次衛門ト称ス常陸ノ人壬戌
二月十五日坂下ニ赴キ其期ニ後レシニ因
テ始末ヲ長郎ニ訴ヘ返答自尽ス内田万之
丞ト云モノ是ナリ今詩一首ヲ存ス
丑更月落凜悲爪別母捨見奈此忠 皇國存込人
不識斬除奸賊報 天公

横田祈綱藤四郎ト称ス下野真田ノ人辛酉
ノ冬國吏ノ為ニ出奔坂下ノ拳棕木石黒等
ト氏ニ奔走周旋シ尔後其所在ヲ知ラズ今
歌五首ヲ録ス

坂下のありをさくくと志ふ山の神子さきあふ
多き風もくは
たふ乃こゝろかーのむまほろを習射ーたうて
いづつあむし
まはるるあまのまふかーあまのまふとーあまのまふ

やまよきまを

たすのよつをやまよきまをいつのそよよせしむ

うゝよのそよ

いまよきまいつはなまのむかひをよし 國ふさ

よし けし

横田昌弼藤太郎ト称ス下野真田ノ人父祈
弼ト凡ニ身ヲ國吏ニ致リト欲シ坂下ノ
列ニ入り其吏ヲ周旋シ壬戌四月晦日捕ハ
レトナリ其歳六月十一日江戸獄舎ニ病死

ス年二十二今歌三首ヲ録ス

やまよきまの山よの田をむすこころをよきまをこころ多
きけつこころえはしるや

まかきあゆの神はまよきまといふせむをいふま
よこころ多神

まよきまをよみ海女袖をよみまよきまをいふま
まよきまをいふま

河野守知禮屋ト号ス下野大道村ノ人嘗テ
下野国誌十二卷南朝百首一卷ヲ著ス乃チ

三嶋三郎ノ祖父ナリ今歌二首ヲ載ス

老忠ヲ慕フ國々むらゝいしきまゝとぬもあまかひゆらゝい
世世はさしほらゝむ

大勇能忍心のまゝふりの本にいり〜まづよくるゝ
せえんはこま

小宅高保文藻ト号ス下野真固ノ人頗ル美
気アリ嘗テ夷狄ノ強梁ヲ思ヒ平居ノ諍尊
攘ノ説ニアラサルナシ老タル故ニ家ニ潜
居ス今歌三首ヲ採ル

皇國をゆるはるるのむすこころりの本をゆゑに
あゝ〜

老をうつそよ〜やめの中は驚きも大和こゑ乃
ふとこゝろもあま

ふる玉の為〜まきいしき〜えの泥をのともる
浦山〜し〜

石黒菫齋別ニ澹雲ト號ス伊豫ノ人某侯ノ
藩士ナリ世ノ奇変ヲ歎シ薙髮凶命シ跡ヲ
山林ニ匿ス嘗テ坂下ノ拳ヲ周旋シ壬戌ハ

月六日江戸獄裏ニ病死ス年二十七詩歌各一首ヲ録ス

只合是非期百年衲衣辭世復聊然迂儒多抱陳編
老壯士元羞瓦礫全辺海爪腥鯨鯢躍帝閭雲昏
旆旌懸男兒自有男兒志一任登孺吟大癩

縣緝字ハ元吉六石ト号ス下野宇都宮ノ人
屏居ニ因テ出ス然レ凡隱然持心ノ力少ナ
カラストス今其詩二首ヲ録ス

冠履倒置事國難 聖旨抑塞不得休神怒人怨敗

在近誰道悠々歲月流 次強介之韻

身死固罔縶絏中心些青天白日同一言贈君之記
取 朝廷分明知其忠 華強介

小山弘字ハ毅卿春山狂史ト號ス下野真罔
ノ人壬戌五月廿九日逮捕ニ就キ諸子ト氏
ニ江戸獄中ニ在リテ養浩日記函丹稿ノ著
アリ其秋閏八月廿七日放還屏居ス今其詩
五首ヲ録ス

一極寒燈照席紅劍舞声高氣勢雄不是尋常離別

比生死誓期恢復切 送諸士之東

人生得失本悠々奇變如欺亦曷憂唯為北堂老親

在教行涕淚落難留 就囚

今日固然殫殘身泛客何肯說悲辛獨憐咫尺隔庭

地唯聽語音不見人 石橋馭旅其強介同宿而不得見

單身一自獄中下疾病死生唯任天縱遇妻兒離別

苦 聖恩難已三千年 獄中病疫

慘兩悽仄日月移此中情況有誰知冤魂一本音容

遠耳底空函絕命詩 平岡士任

菊池教中ノ母民子歌集二卷アリ嘗テ子教

中ニ示ス二首アリ今採録スル者是ナリ

さへさへの法ふおりのふさふさのなきをあたそ

あつさるるかた

さるるのふさふさをのふさふさのふさふさのふさふさ

あつさるるかた

大橋正順ノ妻卷子ハ民子ノ女ナリ其志操

男見ニ劣ラス夫ノ囚中菴居ノ著述ヲ夢路

日記ト云今録スル必皆其卷中ヨリ抄ス



